

# 『茨城県総合郷土研究』における新民謡

- 《磯節》に着目して -

On New Folk Song in *Ibarakikensougokyoudokenkyu*:  
Focusing on *Isobushi*

鈴木慎一郎 SUZUKI Shinichiro (教授 学習科学講座)

キーワード：『茨城県総合郷土研究』, 新民謡, 《磯節》

Key Words: *Ibarakikensougokyoudokenkyu*, New Folk Song, *Isobushi*

## はじめに

本稿の目的は、茨城県師範学校・茨城県女子師範学校によって、1939（昭和14）年に発行された『茨城県総合郷土研究』における新民謡の位置付けを明らかにすることである。

文部省は1930（昭和5）年12月、各師範学校に郷土研究施設費を交付し、全国の師範学校において郷土教育が展開される。各師範学校は郷土室を整備し、生徒主体の学習が開始される<sup>1</sup>。

1935（昭和10）年、文部省は再び郷土研究施設費を交付し、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校に『山梨県総合郷土研究』の編纂を行うよう示唆する<sup>2</sup>。筆者は、『山梨県総合郷土研究』ならびに1937（昭和12）年に発行された、山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』における新民謡の位置付けを検討した。その結果、山梨県師範学校と山梨県女子師範学校の郷土教育において、大衆文化である新民謡が40曲列記され、積極的に取り上げていた点を明らかにした<sup>3</sup>。

文部省は、山梨県に続き、1936（昭和11）年、秋田県、茨城県、香川県を指定して、各師範学校を中心とした『総合郷土研究』の編纂を企画する。1939（昭和14）年3月発行の『香川県総合郷土研究』では、20曲の新民謡が掲載されていた<sup>4</sup>。1939（昭和14）年4月発行の『秋田県総合郷土研究』では、50曲の新民謡が掲載されていた<sup>5</sup>。では、1939（昭和14）年5月発行の『茨城県総合郷土研究』ではどうだったのであろうか。茨城県は、野口雨情（1882-1945）が誕生した地でもある。

茨城県では、1932（昭和7）年頃から「水戸学」を学問背景とした精神涵養を主眼に置いた、郷土教育に関する取り組みが本格化した。1936（昭和11）

年10月、茨城県師範学校は、「郷土研究項目」を文部省に提出した。このことが『茨城県総合郷土研究』編纂の契機となった。

先行研究としては、外池智（2000, 2004）が挙げられる。『茨城県総合郷土研究』の編纂の経緯ならびに茨城県女子師範学校における郷土教育の展開について明らかにされている<sup>6</sup>。外池は、山梨県師範学校と比較して、「作業」と郷土教育とを直接的に結びつけ展開していたところを茨城県女子師範学校の特色と指摘する。当然のことながら、民謡や新民謡を対象とした研究ではないため、民謡や新民謡については言及されていない。

他方、伊藤純郎（1998）は、茨城県の郷土教育運動を整理した後、茨城県師範学校附属小学校や茨城県師範学校第二附属常盤小学校（現、水戸市立常盤小学校）の郷土教育運動を考察する。茨城県の郷土教育運動は、「敬神崇祖皇室尊宗」観念を根幹とした教育潮流を背景に、茨城県師範学校・茨城県教育会の主導により、「水戸学の精神」を基調とした、「愛郷心・愛国心涵養型、大和民族精神昂揚型」の郷土教育であったと定義する<sup>7</sup>。

研究方法としては第一に、茨城県の郷土教育を概観する。第二に、1934（昭和9）年に茨城県女子師範学校によって発行された『郷土教育概要』における民謡の位置付けを整理する。第三に、『茨城県総合郷土研究』の編纂の経緯を概観した後、『茨城県総合郷土研究』における民謡に着目し、新民謡の位置付けを明らかにする。第四に、《磯節》に着目して考察する。以上の作業を通して、茨城県師範学校・茨城県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを解明する。

## I. 茨城県の郷土教育の概観

### 1. 茨城県の郷土教育

茨城県の郷土教育について、櫻村勝は以下の点を挙げる<sup>8</sup>。

- ①1930（昭和5）年、文部省は全国師範学校に郷土教育の基礎としての郷土研究施設を奨励した。
- ②1931（昭和6）年12月、本県師範学校本科第8回卒業生（1895、明治28年3月）、当時奈良女子高等師範学校教授小川正行を講師として、郷土教育に対する指導を受ける。
- ③1932（昭和7）年10月、第28回関東連合教育会が水戸市に開催され、「郷土愛好ノ精神ヲ涵養スル為メ教育上特ニ留意スヘキ事項如何」という文部省の諮問に対する研究討議が行われた。
- ④1932（昭和7）年10月1日茨城県教育会が茨城教育特輯号として「郷土精神」を刊行した。
- ⑤1933（昭和8）年4月22日より同24日迄三日間にわたり、茨城県師範学校を会場として郷土工作品展覧会が開催された。郷土色豊かな製作品626点が出品され、郷土研究に対する具体的資料が提示された。
- ⑥1937（昭和12）年1月26日茨城県告示第53号を以って「茨城県郷土研究会規程」が公布され、県が中心となり、郷土の総合的研究が正式に発足することになった。
- ⑦1937（昭和12）年、茨城県男女師範学校が総合的な郷土研究を開始した。
- ⑧1937（昭和12）年、茨城県教育会主催により「郷土教育系統案」についての懸賞募集が行われ、県下500余校が応募するという盛況を呈した。
- ⑨1939（昭和14）年5月31日、茨城県男女師範学校の共同研究による『総合郷土研究上・中・下』が刊行された。
- ⑩1940（昭和15）年、水戸城天守閣を利用し、水戸学を中心とする資料が募集展示され、教学閣と名付け、水戸教学資料室の施設をみることになった。

茨城県の郷土教育について、伊藤純郎は以下の通り、整理する<sup>9</sup>。

- ①1928（昭和3）年12月、天皇より「教化ト人心ノ帰趨ヲ正ク」せよとの「教育ニ関スル沙汰」が文部大臣にくんだり、『茨城県報』号外を通して「沙汰」の主旨徹底がはかられた。
- ②茨城県教育会は、翌1929（昭和4）年11月、知事諮問に答申する形で、「敬神崇祖皇室尊宗」観念の培養を教化の主眼とする思想善導方針を打ち出し、学校教育では訓育を最重視する「情意の教育」が進められた。
- ③郷土研究施設費交付を受けて始まった茨城県師範学校の郷土教育の内容は、「水戸学の発生地」という事情もとめない「水戸学の精神」を発揚して郷土愛、祖国愛を涵養するもので他県と趣を異にした。同校は1937（昭和12）年に茨城県郷土研究会を設立し、1939（昭和14）年には『総合郷土研究 茨城県』全三巻を刊行した。
- ④1931（昭和6）年12月に奈良女子高等師範学校教授小川正行による郷土教育講演会が、翌1932（昭和7）年10月には水戸市で関東連合教育会が開催され、郷土教育はさらに進展した。茨城県教育会は『茨城教育』第577号（昭和7年10月）で「郷土精神」特集号を編集して郷土教育運動を推進、1939（昭和14）年には茨城県教育綱領を制定した。
- ⑤郷土教育は茨城全県下に広まり、とりわけ茨城県師範学校附属小、同第二附属小、水戸市内小学校、水戸市内近郊の湊尋常高等小、徳川光圀隠棲の地である太田尋常高等小では、「水戸学の精神」に基づく郷土教育が強力に展開され、「文教茨城」の名声は全国に広まった。

このように奈良女子高等師範学校教授であった小川正行（1873-1956）の指導を受け、水戸学に基づきながら、茨城県師範学校・茨城県女子師範学校が中心となって郷土教育を推進している。

表1は、茨城県師範学校と茨城県女子師範学校の変遷を一覧にしたものである。

その他、1927（昭和2）年、常盤尋常高等小学校は、茨城県師範学校第二附属常盤小学校となる。1932（昭和7）年には、『郷土教育の再検討と其の実際的研究』が発行される。

表1 茨城県師範学校・茨城県女子師範学校の変遷

年	男子	女子
1874(明治7)	拡充師範学校	
1876(明治9)	茨城県師範学校	
1877(明治10)	茨城県師範学校附属小学校	女子師範科設置
1880(明治13)		女子師範科廃止
1886(明治19)	茨城県尋常師範学校	
1898(明治31)	茨城県師範学校	
1903(明治36)		茨城県女子師範学校
1905(明治38)		茨城県女子師範学校附属小学校
1927(昭和2)	茨城県師範学校第二附属常盤小学校	
1932(昭和7)	『郷土教育の再検討と其の実際研究』	
1934(昭和9)		『郷土教育概要』
1939(昭和14)	『茨城県総合郷土研究』	『茨城県総合郷土研究』
1941(昭和16)	茨城県師範学校附属国民学校	茨城県女子師範学校附属国民学校
1943(昭和18)	官立茨城師範学校男子部	官立茨城師範学校女子部
	茨城師範学校男子部附属国民学校	茨城師範学校女子部附属国民学校

出典 樫村勝『茨城県師範学校史』1973年から作成。

## II. 『郷土教育概要』における民謡

### 1. 茨城県女子師範学校における郷土教育

1934(昭和9)年5月、茨城県女子師範学校から『郷土教育概要』が発行される。「一、我が校に於ける郷土教育施設の概要」と「二、郷土館資料目録」で構成される。茨城県女子師範学校では、「郷土教育施設を動的に」、「郷土教育を作業的に」に重点が置かれている<sup>10</sup>。郷土教育特別施設として以下が設けられた<sup>11</sup>。

郷土館  
郷土園及小離舎  
気象観測

郷土教育は、以下の通り実施された<sup>12</sup>。

イ、郷土地誌及郷土史の教授  
ロ、各科別による郷土教育  
ハ、各科協力による郷土教育  
ニ、作業と郷土教育  
ホ、附属小学校に於ける郷土教育施設

「ロ、各科別による郷土教育」における「6、図画、音楽科」では、以下の通り、示される<sup>13</sup>。

郷土的画材の選択 写生画材の郷土化、図案は学校生活に必要な図表並にポスター類、家庭生活に必要な家具類の選択。

県内国宝(保護建造物)に就て美術史的解説並に鑑賞。

地方の民謡、俗謡、小唄の批判並に研究。

「ハ、各科協力による郷土教育」では、以下が展開された<sup>14</sup>。

- 1、郷土館郷土園の活用
- 2、見学、踏査、校外教授
- 3、夏季休暇中の郷土研究
- 4、各科増課生の郷土研究
- 5、郷土資料の製作

1932(昭和7)年度の「3、夏季休暇中の郷土研究」では、「民謡俗謡の蒐集」を行った生徒もいた<sup>15</sup>。

「4、各科増課生の郷土研究」では、「民謡の調査」を行った生徒もいた<sup>16</sup>。その他、下記の通り、説明される<sup>17</sup>。

休暇中職員生徒の採集せる資料により、或は増課生の特殊研究等を基礎とし郷土の総合的研究調査も着々進みつつあり。左に研究調査の主要なるものを挙ぐ。中には大体完了を告げしもの、又研究調査続行中のものもあり。完了のものは印刷又は謄写に附して全校生徒、附属小学校等に配布する考なり。

ここには「児童間に行はれる民謡の研究」、「水戸地方に於ける邦楽の変遷」が挙げられている<sup>18</sup>。

「ニ、郷土館資料目録」の構成は以下の通り。

- 一、沿革
- 二、物産
- 三、自然
- 四、社会文化
- 五、調査研究物
- 六、図書参考文献

表2に示した通り、「四、社会文化」と「五、調査研究物」には、民謡に関するレコードや報告書が列記される。曲名のみで、レコード番号は掲載されていない。『SPレコード60,000曲総目録』に基づく、ニッポノホンから、1907(明治40)年から1922(大正11)年までの間に発売されたSPレコードの《磯節》の裏面に《大漁節》が録音されている(16916)<sup>19</sup>。1912(大正元)年から1917(大正6)年までの間にナショナル(大阪蓄音器)から発売されたSPレコードも、《大漁節》(4693)と《磯節》(4694)が表裏と考えられる<sup>20</sup>。1928(昭和3)年から1944(昭和19)年までの間にコロムビアから発売された、《磯節》と《大漁節》(A-802)は表裏である<sup>21</sup>。1921(大正10)年から1935(昭和10)年までの間にニッターから発売された《磯ぶし》と《大漁節》(254)も表裏である<sup>22</sup>。以上から、《大漁節》は千葉県の民謡の側面が強いにもかかわらず、挙がっているのはSPレコードの表裏の関係からである。

《筑波小唄》、《筑波節》は、茨城県出身の野口雨情作詞、藤井清水作曲の新民謡。1930(昭和5)年に発表、ビクターからSPレコードが発売され、A面に《筑波小唄》、B面に《筑波節》が録音される<sup>23</sup>。

《古河小唄》は、落合白桃作詞、石塚福太郎作曲の新民謡である。1927(昭和2)年から1944(昭和19)年の間に、ポリドール(日本ポリドール蓄音器商会)から、SPレコードが発売される(697)<sup>24</sup>。歌唱は茨城

県古河町(現、古河市)の美照・又吉・駒奴により、伴奏は鳴物連中による。裏面には、野中岳史作詞、石塚福太郎作曲の《枕河小唄》が録音され、古河のとんぼ・清香・咲松と鳴物連中により演奏される。

表2 郷土館資料目録

p.	教科	見出し
38	四、社会文化	レコード 郷土音楽レコード 《磯節》 《大漁節》 《筑波小唄》 《古河小唄》 《筑波節》 《盆踊》
40	五、調査研究物	郷土民謡調査 生徒 7 郷土小唄調査 生徒 3 郷土体育調査 生徒 2

出典 『郷土教育概要』茨城県女子師範学校、1934年から作成。

### Ⅲ. 『茨城県総合郷土研究』における民謡

#### 1. 『茨城県総合郷土研究』編纂の経緯

表3は、『茨城県総合郷土研究』編纂の経緯である。1936(昭和11)年10月に「郷土教育研究項目」を文部省に提出したことが契機となって編纂が開始される。12月には、小田内通敏の指導を受ける。1937(昭和12)年6月には、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校で観察聴取を行い、参考に行っている。1938(昭和13)年9月、原稿を提出し、1939(昭和14)年5月、印刷、発行される。

表3 『茨城県総合郷土研究』編纂の経緯

年	月/日	内容
1936(昭和11)	10/12	「郷土教育研究項目」を作成し文部省に提出
	12/24	小田内通敏、来県
1937(昭和12)	1/9	連絡係を設け、男子師範に於いて第一回打合会
	1/19	小田内来県し、女子師範に於いて部門の主任会議
	1/26	『茨城県報』に茨城県告示第五十三号として、茨城県郷土研究会規程が公表
	1/26	予算の令達
	2/9	県庁に於いて根本的事項の打合せ
	4/21	各部門の執筆者及び題目を集め一覧表を作成、配布
	6/8	女子師範に於いて両校連絡委員会を開き、執筆分担一覧表の修正加除
	6/25-26	山梨県師範学校・山梨県女子師範学校を観察聴取

1938(昭和 13)	6/28	県庁に於いて会議
	7/20-21	小田内来県
	10/1-3	小田内来県
	2/21	文部省に研究経過報告
	3/3-4	女子師範に於いて小田内の個別指導
	3/5-6	男子師範に於いて小田内の個別指導
	3/6	連絡委員会, 小田内臨席
	7/20	女子師範に於いて連絡委員会を開催, 原稿締切を9月上旬
	9/15	原稿を全部まとめ男子師範第二郷土室に保管
	12/8	男子師範に於いて連絡委員会
	12/14	男子師範に於いて総目録を作成
	12/15	文部省に経過の大要を報告
	12/16	県特高課の検閲を受ける
1939(昭和 14)	12/17	憲兵隊との交渉
	12/17	男子師範に於いて編集委員会
	1/11	男子師範に於いて編集委員会
	1/17	県学務課に出頭
	2/13	出版印刷契約成立
	5/28	印刷
	5/31	発行

出典 『茨城県総合郷土研究』下巻, 1939年, pp. 569-570 から作成。

## 2. 『茨城県総合郷土研究』の構成

『茨城県総合郷土研究』は, 1939(昭和 14)年5月, 上巻, 中巻, 下巻の3冊, 発行される。各巻の目次は以下の通りである。

### 上巻

序文  
自然環境  
沿革  
人口  
聚落

### 中巻

産業及経済  
交通  
行政及財政

### 下巻

社会  
文化  
教育

- 二 神社及宗教
- 三 芸術
- 四 科学的施設
- 五 民俗
- 六 史的記念物
- 七 文化施設
- 八 武道

民謡は「三 芸術」と「五 民俗」の両方で取り上げられている。

「三 芸術」は, 以下の通り, 構成される。民謡は「3 音楽」で取り上げられる。森田秀雄が執筆する。森田は1927(昭和 2)年, 東京音楽学校甲種師範科を卒業した。茨城県師範学校の教諭で音楽を担当した。

- 1 文芸
- 2 工芸
- 3 音楽
- 4 舞踊

## 3. 『茨城県総合郷土研究』における民謡

『茨城県総合郷土研究』において民謡は「文化」の大項目の中に掲載される。「文化」は以下の中項目によって構成される。

### 一 道徳

「五 民俗」は以下の通り, 構成される。民謡は「5 民謡」で取り上げられる。

- 1 民間信仰
- 2 伝説
- 3 俚諺

- 4 方言
- 5 民謡
- 6 地名

「三 芸術」の「3 音楽」は、以下の通り、構成される。

- 緒言
- 潮来節
- 磯節
- 炭磯節
- 筑波神楽歌
- 金砂田楽

「緒言」では以下の通り、始まる<sup>25</sup>。森田は、真の民謡には、数十年の歳月と唄われるだけの生命を必要とするため、新民謡は該当せず、郷土音楽にも属さないと述べる。

郷土音楽、即ち民謡と称せられるものは、其の土地に発生し、其の土地に盛に唄はれ、其処に郷土と離れることの出来ない特殊の色彩を持ったものでなければならぬ。

此の意味から、近年各地に発生し、盛に唄はれる所謂新民謡と称するものが多くあるが、之等は真の民謡と称せられるまでには、今後少くとも数十年の歳月と、それが盛に唄はれるだけの生命とを有するものでなければならぬ。此の点から見て、此処に述べる郷土音楽は前者に属するもので、後者の新民謡については触れないつもりである。

「三 芸術」の「4 舞踊」では、次のように言及する<sup>26</sup>。橘はやが執筆する。橘は 1922(大正 11)年、東京音楽学校本科器楽部を卒業した。茨城県女子師範学校の教諭で音楽を担当した。

尚近年各地方に流行る舞踊は時代の生んだラヂオ及び歌謡曲や流行歌・小唄等のレコード氾濫の影響によつて、近代的特点を持った舞踊が創造されて来たのである。即ち上に書きあげた歌曲の音楽は、いずれも日本的旋律の上に洋式旋律を加味して作曲されてをり音楽のリズムにのつて組立てられる舞踊に於ても、さうした型式をたどるのは当然の事ではあるまいか。即ち優美典雅な日本舞踊の風情に、動的要素を外分に持つてゐる洋式舞踊の型を取入れて表現してゐ

るのである。

本県に於ても主として都会地に於て小唄が盛んに作られ、それに振を付けて各種の舞踊となつて進出して来た。之等の舞踊は一時的流行のものが多く、前にあげた特殊舞踊に比較して生命の永続性が稀薄であると云ふことや、郷土色が明確にあらはれてゐないと云ふ事などが之等舞踊の通性と思はれる。

「五 民俗」の「5 民謡」は、291 から 299 ページにかけて、以下の通り、構成される。茨城県女子師範学校の教諭で国語漢文を担当した、小沼俊平が執筆する。

- 文献にみえるわが郷土民謡
- 伝誦的民謡
- 新作民謡
- 結語

「伝誦<sup>しよ</sup>的民謡」は、292 から 298 ページにかけて、以下の通り、校正される。

- 一 宗教歌
- 二 祝賀歌
- 三 労作歌
- 四 舞踊歌
- 五 童謡
- 六 雑謡

「六 雑謡」について、小沼は次のように記し、「郷土的色彩が著しい」と捉える<sup>27</sup>。

或は宴会の席において、或はある種の行事に沿して歌はれるものを一括して雑謡とした。磯節・大漁節・潮来節・十よ七音頭・播鉢くどき・八幡山・さんやれ節・猫ぢや・あんば囃子・鳥追歌等がそれであつて、この一群の歌謡に尤も郷土的色彩が著しいのである。

#### 4. 『茨城県総合郷土研究』における「新作民謡」

「新作民謡」は、以下の通り、始まる<sup>28</sup>。小沼は、郷土の紹介宣伝のため、俗謡駆逐のため、郷土心振作のために、おびただしい数の新民謡が作成されていると述べる。県当局によって青年の歌として選定され、レコードや振り付けも加えて宣伝されている。

近時各地方においては、それぞれ郷土の自然風

尚を織込んで、××小唄・××節・××音頭の類が、有名無名の詩人の手によつて作られ、その数は夥しきものに達してゐる。而してそれは或は郷土の紹介宣伝のため、或は俗謡駆逐のため、或は郷土心振作等の意図の下に為されてゐるのである。県当局によつても男女青年の意気高揚に資せんがため青年の歌が選定せられ、盛んにその利用につとめてゐるのである。これら多くの歌の中には、単に歌詞曲調のみにとどまらず、或はレコードにより、或は振付までして宣伝に

つとめてゐるものも少くない。

『茨城県総合郷土研究』には曲名のみしか掲載されておらず、表4は、筆者により整理した。なお、「東茨城郡・那珂郡・結城郡の三地方からは報告に接しないので新作民謡はないものと思ふ」と補足される<sup>29</sup>。

茨城県出身の野口雨情が作詞した新民謡は、5曲(10%)である(《助川小唄》,《龍ヶ崎小唄》,《龍ヶ崎音頭》,《筑波小唄》,《筑波節》)。

表4 『茨城県総合郷土研究』における「新作民謡」

		曲名	年	作詞	作曲	振付	レコード
1	水戸市	水戸市歌	1935(昭和10)	北原白秋	山田耕筰		
2		大工町小唄					
3	西茨城郡	笠間小唄					
4		笠間音頭					
5		笠間節					
6		羽鳥小唄					
7	久慈郡	太田音頭	西條八十補	中山晋平		ビ 1931	
8		太田小唄					
9		袋田温泉小唄					
10		久慈浜音頭					
11		西野内音頭					
12		世喜音頭					
13	多賀郡	松原音頭	西條八十	中山晋平		ビ 1934	
14		高萩小唄					
15		高萩炭坑節					
16		河原子音頭					
17		河原子八景					
18		日立小唄					
19		助川小唄	1933(昭和8)	野口雨情	本居長世		
20		大津節					
21		大津新大漁節					
22		日高小唄					
23		日高全村音頭					
24	鹿島郡	若松音頭					
25		軽野小唄	1932(昭和7)	野口雨情	藤井清水		
26		グライダー小唄					
27	行方郡	行方郷土改良流行節					
28	稲敷郡	龍ヶ崎小唄					
29		龍ヶ崎音頭					
30		根本村繁昌節					
31	新治郡	土浦音頭	1932(昭和7)	野口雨情	藤井清水		
32		土浦節					
33		土浦瓢箪踊り					
34		石岡音頭					

35		石岡酒屋音頭					
		高浜音頭					
36		宍塚音頭					
37		田余小唄					
38	筑波郡	筑波小唄	1930(昭和5)	野口雨情	藤井清水		ビ 1931
39		筑波節	1930(昭和5)	野口雨情	藤井清水		ビ 1931
40		眞瀬音頭					
41		上郷音頭					
42	眞壁郡	下妻小唄					
43		大国音頭					
44	猿島郡	古河小唄		落合白桃	石塚福太郎		ポ 1931
45		枕河小唄		野中岳史	石塚福太郎		
46		藍菘					
47		古河囃子		結城武夫	丸山藤一		ミリオン
48		境小唄					
49	北相馬郡	布川音頭					
50		大利根小唄					

「結語」として次のようにまとめられる<sup>30</sup>。小沼は、生活形態の変化に伴い、伝統的民謡が唄われにくくなり、郷土的特色が失われつつあると述べる。その一方、新作民謡や俗謡が広がり、《磯節》、《潮来節》、《鹿島の祭頭歌》等がラジオ等で全国に紹介されていると言及する。

翻つて、時代の流に沿うて観ると、種々の文化機関の発達普及につれてわが郷土の生活形態が漸く一般化されるに至り、その郷土的特色が失はれつつある今日、伝誦され来つた民謡も共に民衆の口から離れ去つてゆかうとする運命にあるのである。而してそれに代る新作民謡や俗謡等が勢を呈しうするに至り、緩かに磯節や潮来節や鹿島の祭頭歌等がラジオ等によって全国に紹介されて、わが郷土民謡のために気を吐いてゐるに過ぎない現状にある。

前述の通り、《磯節》は「伝誦的民謡」の中の「六雑謡」に位置付けられた。表4に示した通り、「新作民謡」は50曲列記されたものの、曲名に留まっていた。特段、解説されたり、楽譜が掲載されたりした新作民謡はなかった。次項では、「雑謡」に分類された《磯節》に着目して検討していきたい。

#### IV 《磯節》

##### 1. 『茨城県総合郷土研究』における《磯節》

『茨城県総合郷土研究』では、「五 民俗」の「5

民謡」の中の「六 雑謡」において《磯節》は、小沼によって次のように記される<sup>31</sup>。

磯節は江戸時代に水戸の船乗が主として江戸に通ふ時水戸の船なる事を誇らかに歌つたもので、明治になつてから三味線に合はせたといふ。時代の経過と共に歌詞も沢山作られ、曲節も雄渾から繊細へと変化を見せたが、就中古いものは次の如きであろう。

磯で名所は大洗様よ松が見えますほのぼのと  
舟はちやんころでも炭薪や積みぬ積んだ荷物は  
米と酒

三十五反の帆を巻きあげて行くよ仙台石巻

「三 芸術」の「3 音楽」において《磯節》は、森田によって次のように記される<sup>32</sup>。

水上労働歌として、本県のみならず全国的に見ても、其の代表的のものと称せられるものである。

太平洋の怒濤を背景とした豪壯雄大なもので、現代の機械船の出現以前に、遠く奥州に或は江戸に海上運送をなし、或は遠洋に漁業するのに皆櫓を用ゐた時代に、其の櫓を操る身体的運動に伴つて発生した一つの労働歌である。

当時那珂川口の湊は、之等舟運及漁業の要点として船舶輻輳し殷賑を極め、此処を中心として、磯節が発達したものである。

現在行はれて居る三味線伴奏及囃子は、此の水

上労働歌が花街で唄はれる様になつてから発生したもので、元来は波の音、櫓の音を伴奏としたもので、三味線の伴奏は其の波の音を模したものと見られる。

形式は七七七五より成り、一句は七七，二句は七五の形を持ち、第二句は旋律上第一句を反復し、尚歌詞の第二句を反復して第三の旋律を形成して居る。(楽譜参照)



出典 『茨城県総合郷土研究』下巻，1939年，p. 192。

楽譜 1 《磯節》

「三 芸術」の「4 舞踊」の中の「娯乐的芸術的舞踊」において《磯節踊》は、橘によって次のように記される<sup>33</sup>。

磯節はもと仙台の松前節から取つたものらしい。つまり仙台から港に船が入つて来る度に松前節が漁師から漁師へと伝はり、それが当時盛り場であつた祝町有志によつて現在歌はれている所の磯節に作りかへられたものであると云ふ。広々とした大洋を望んで歌ふにはふさはしいのびのびした旋律であるが、一面漁師達の朴訥さや三浜海岸から太平洋を睥睨した時に持つ勇壮宏大な情調が薄いやうに思はれる。尤も現在の唄は原形から見れば相当手が加へられてゐるであらうし、新興旋律の影響と云ふことや、漁民大衆の歌から芸人のそれに移つて行つたと云ふことなども考へられるのである。この舞踊のテーマは、網を手繰る時の手付や足の動作からとつて作られたものらしいが、所謂娯乐的舞踊にすぎない。現在は漁師達が踊ると云ふよりもむしろ一般社会人の鑑賞用として演技される場合が多いやうである。特に最近大洗が海水浴場とし又名勝の地として世に認められ、且水戸市との交渉も道路改修等によつて頻繁と

なり、随つて演技される機会が多く、大洗の磯節と云へば、今では名物の一つとなつてゐる。左に歌詞の代表的なもの二三と、踊の型及歌曲を示す。  
三十五反の帆をまきあげて、行くよ仙台、石の巻。  
船はチャンコロでも炭薪積まぬ、積んだ荷物は米と酒。  
水戸を離れて東へ三里、波の花散る大洗。



出典 『茨城県総合郷土研究』下巻，1939年，p. 202。

図 1 磯節踊

このように《磯節》は、『茨城県総合郷土研究』において「民謡」、「音楽」、「舞踊」の三箇所にわたって丁寧に取り上げられ、主要な民謡として位置付けられる。「宴会の席」、「花街」、「盛り場」と表記は異なるものの、伝統的な民謡が宴席を通して編曲、普及したという変遷は共通している。中でも「舞踊」では「祝町有志」が登場する。祝町には祝町遊郭があった。

## 2. 祝町遊郭

祝町遊郭は、1695(元禄 8)年、徳川光圀(1628-1700)が治める水戸藩公認の遊所として成立した。「洗濯屋」と称され、そのいわれは、入港する船の水主達の洗濯を請け負っていた婦女子が、衣類の洗濯のみならず、その身も売っていたということに由来する<sup>34</sup>。

1727(享保 12)年、暴行事件が起こり、廃止され、1747(延享 4)年、再興する。最盛期は、1861(文久元)年から1863(文久 3)年までである。

1864(元治元)年、藤田小四郎(1842-1865)ら水戸藩尊攘派が筑波山に挙兵した天狗党の乱が起き、祝町も戦場となり、焼失する。さらに明治以降、那珂湊港へ入る廻船も減少したことも、祝町遊郭が廃れていく要因であった。大正期に入ると、衰退の一途をたどり、1930(昭和 5)年、廃止される<sup>35</sup>。

## 3. 先行研究における《磯節》

1944(昭和 19)年に発行された『日本民謡大観』では、次のように説明される<sup>36</sup>。「民謡と云ふよりは寧ろ俗謡」、「座敷の唄」、「宴席の唄」と捉える。

この唄は安来節や大漁節と同じく民謡と云ふよりは寧ろ俗謡として全日本的に有名である。常陸海岸の舟唄(櫓漕唄)が元でこの節が生まれたと伝えられるが、その年代も作者も解らない。それにこの唄の節の現拠を為してみると云ふ舟唄も全然この海岸には残って居ないので海の労働歌を、どの程度に三絃を技巧化して今の磯節になったものか全然解つてゐない。(中略)尚この唄を幕末当時の文献等に徴して見ても一向見当らない所を見ると或ひは明治になつてから祝町あたりの遊郭からやりだしたものではあるまいかと思ふ。従つてこれは全く座敷の唄として誕生したものとして見るべきである。この唄が東京へ紹介され一般から認識されるようになったのは明治 23 年の憲法発布以後のことでそれも主として席亭の高座であつた。それが何時と

なく川柳界方面へ伝播して宴席の唄となり全日本的に普及するに至つた。而して本元の茨城県では水戸を初め湊平磯・磯浜等の花柳界が何れもこの唄を売物にしたが、大洗の按摩安中が声曲を能くし、この磯節に独得の妙味があるとして賞美され、殊に水戸出身の角力界の傑物常陸山谷右衛門が彼を鼻負にして東都方面にも紹介したので磯節の安中か、安中の磯節かと云はれるに至り、同地方へ遊ぶ人々は、必ず彼の磯節を聞いて帰ることを一つの土産咄とした位であつたと云ふ。その安中も昭和の初めに物故したが、幸ひ彼が大正時代に鷺印レコード(3376)に吹込んだレコードが残つてゐた。

1960(昭和 35)年に発行された町田嘉章・浅野建二編『日本民謡集』では、次のように解説される<sup>37</sup>。「お座敷唄」として捉える。

江戸時代から行われた常陸海岸の舟唄(櫓漕唄)を基にして作られたお座敷唄。編曲は那珂湊で芸妓置屋をしていた矢吹万助氏(通称芸多くげた>満)の娘ハルなどで、明治 20 年代のことという。また磯節を今日のように流行らせたのは、大洗にいた美声の盲人、安中(あんじゅう)と角力の常陸山谷右衛門との宣伝宜しきを得た結果で、特に安中は、同席の芸妓の下手な磯節に対して「わたしの磯節東(ひがし)の果(はて)よ、銚子外(はず)れて水戸もない、調子はずれでイソおおあらい」などと皮肉つたという。民謡としてよりもむしろ俗曲として有名。

1975(昭和 50)年発行の『日本民謡全集』では、次のように記される<sup>38</sup>。

《磯節》は茨城県の代表的民謡で、歌詞の「波の花散る大洗」によって大洗を全国的に有名にしてきた。大洗町、那珂湊中心の歌である。もとは櫓こぎの作業歌であつたのを、明治 20 年代に三味線歌に編曲され、のち祝町の俳人渡辺竹楽坊によって歌詞も整理されたともつたえられている。

1981(昭和 56)年発行の山形雄三『祝町昔がたり』によると、《磯節》の編曲補作者として渡辺竹楽坊(1845-1920)、《磯節》の流し芸人として泉や小兼、《磯節》の普及者として矢吹萬介、《磯節》を広げた按摩師として安中(1877-1940)を挙げる<sup>39</sup>。

1983(昭和 58)年発行の浅野建二『日本民謡大事典』では、次のように説明される<sup>40</sup>。「座敷唄」として捉える。

茨城県の代表的な座敷唄。東茨城郡大洗町、那珂湊市の海岸で歌われてきた唄で、起源は古い文献がないため明らかにすることは困難であるが、江戸時代から歌われた太平洋の船唄(櫓漕唄)が元になっているともいう。明治になって座敷唄として、三味線伴奏がつけられ、花柳界で盛んに歌われるようになった。一説によれば明治中頃、那珂湊の芸妓置屋芸多満主人矢吹万助の娘ハル(金太)や引手茶屋の主人竹楽坊渡辺精作などの人びとによって、囃子や振付がつけられたとも、また《磯節》を今日のように流行らせたのは大洗町生まれの盲人で美声の持ち主、関根安中が歌う《磯節》を水戸出身の横綱常陸山谷右衛門が気に入り安中を愛顧して《磯節》を紹介し、次第に全国にひろまったともいう。現在《磯節》の歌詞は60余もある。詞型「七七七五」・三弦。

2018(平成 30)年発行の竹内勉『日本民謡事典Ⅱ』では、次のように言及される<sup>41</sup>。「お座敷唄」として捉える。

茨城県のお座敷唄。茨城県の中東端、那珂川が太平洋へ注ぐ河口の北側に広がる那珂湊(ひたちなか市)から、南側の祝町遊郭(東茨城郡大洗町)にかけての花柳界の宴席で、芸者衆が唄ってきたものである。(中略)

この(《越後甚句》)の流行期は、《磯節》を広めた関根安中の時代と重なるので、大洗の花柳界でも流行していた《越後甚句》が、《大洗甚句》へ、さらに《磯節》へと発展していったものと思われる。(中略)

那珂湊の芸者置屋の主人、矢吹万助(通称、下駄万)は、その流行り唄の《越後甚句》から発展した《大洗甚句》を、明治時代に今日の《磯節》にまとめあげた。(中略)

一説に、《磯節》は竹楽坊(通称ちくらっぽ、本名渡辺精作)という俳諧の宗匠が作ったという話がある。しかし、俳諧師は節はいじれないので、歌詞を何首か作ったと考えればよいであろう。その《磯節》を有名にしたのは、矢吹万助の長女金太である。ところが水戸(水戸市)にも金太という芸者があり、この人がこの唄をレコード

で広めた。しかし、日本中へ広めたのは、花柳界の三味線唄ではない、三味線に乗りにくい「浜唄」的な《磯節》の関根安中であつた。

安中は本名を丑太郎といい、1877年5月3日に現大洗町の磯浜町で漁師の息子として生まれたが、20歳頃に風眼で失明し、按摩になった。ところが、1907年頃に、時の横綱、水戸出身の常陸山と出会った。横綱は、力の強い按摩で、美声で、少し頭が弱い安中を幫間として連れ歩いた。そして、巡業先で招かれると、客の前で《磯節》を唄わせた。かくして、《磯節》と関根安中の名は、常陸山の名声とともに日本中へ広まっていた。

以上を一覧にしたものが表5である。《磯節》は元々、舟唄(櫓漕唄)であつたものが、宴席により、編曲や歌詞の修正がなされ、作成された。編曲者については、渡辺竹楽坊とする説や、矢吹万助の娘ハルとする説や、矢吹万助とする説と分かれている。関根安中によって流行したという点には異論がなかった。なお、1919(大正8)年には、民謡調査を行っていた野口雨情と中山晋平が、関根安中の唄を聴いている(図2)<sup>42</sup>。

レコードによって広がったという記述もみられた。『SPレコード60,000曲総目録』に所収されている《磯節》のSPレコードを整理したものが表6である。

まずもって驚かされるのは、明治期においてレコード化されていた点である。『日本民謡大観』にも記されていた3376のSPレコードは、ニッポノホン発行で、安中が唄っていると一致する。

これらのことから、《磯節》は、伝誦的民謡というよりは、新民謡としての性格が強いことが分かる。



出典 森垣二郎『レコードと50年』1960年, p. 184。

図2 中山・安中・野口

表5 先行研究における《磯節》

書名	発行年	種類	編曲者	唄	備考
日本民謡大観	1944	俗謡, 座敷の唄 宴席の唄		按摩安中	レコード (3376)
日本民謡集	1960	お座敷唄	矢吹万助氏の娘ハル	安中	
日本民謡全集	1975				渡辺竹楽坊
祝町昔がたり	1981		渡辺竹楽坊	安中	矢吹萬介
日本民謡大事典	1983	座敷唄	矢吹万助氏の娘ハル 渡辺竹楽坊	関根安中	
日本民謡事典Ⅱ	2018	お座敷唄	矢吹万助	矢吹万助の長女金太 関根安中	レコード(金太)

表6 《磯節》のSPレコード

会社	番号	演奏	伴奏	備考
アメリカ・コロンビア	2386	吉原ゞ壽		明治期
アメリカ・ビクター	11056	笑福亭可楽	たね	明治期
ドイツ・ライロフォン	70722	栄丸	(絃)鈴延(太鼓)友奴	明治期
	71205	永井延二郎	銀杏廣ぼんち/吉川小かね	明治期
ニッポノホン	1048	ゞ治		
	2009	吉原ゞ治		
	<b>3376</b>	<b>安中, 町子, 雛助</b>		上
	3377	<b>安中, 町子, 雛助</b>		下
	16887	水戸大洗=栄龍・福奴		
	16916	とんぼ, つる代, 友代	福奴, 栄龍	
ヒコーキ	4694	新常盤金太/梅よし福松/大和田のし		1919(大正8)年～
トウキョウ・フジサン	65936	美代壽/のぶ子	金太・こやな・太鼓入	大正
コロムビア	25954	美代壽/ゞ子/新吉	三味線・太鼓	昭和
	100405	ニ三吉/佐々木章	小静・秀葉・梅屋社中	平山蘆江, 作詞
	A-802	<b>金太</b>	おもちゃ・増子	
ビクター	50283	福奴	大洗芸妓連	
	51664	葎町勝太郎	葎町勝太郎	
	53156	小唄勝太郎/徳山璉	小唄勝太郎/徳山璉	長田幹彦
	J-10041	那珂湊小勇/小鹿	(絃)那珂湊千龍・藤奴(太鼓)那珂湊竹千代	
	J-10041	那珂湊登喜代/時奴	(絃)那珂湊千龍・藤奴(太鼓)那珂湊竹千代	
	S-1208	新常盤家金太	分常乃おもちゃ	
ポリドール	216	一心亭栄龍	一心亭栄龍	昭和
キングレコード		豆太	富士音盤 Orch	1930(昭和5)年～ 時雨音羽, 作詞
ニッポー	253	小六/藤奴/鶴代		1920(大正10)～ 1935(昭和10)年
	254	小六/藤奴/鶴代		

	1032		日東管絃団	
	2328	港家奈美江		
	3296	かじ勝, 福奴	勝千代	
スタンダード		春風二三吉	三味線・鳴物入	1931(昭和6)年～
テイチク	T3362	東海林太郎	テイチク Orch	村松秀一, 作詞 長津義司, 編
カブトレコード	643	吉原ゞ治		
ムセレコード	112	吉原ゞ治		
太陽蓄音器	2197	水戸ゞ太	囃子鳴物連中	
オーゴン	1293	浅草勝江	吉原小えつ	1932(昭和7)年～
ショーチク	S-2216	加藤忍月	小川龍水・小川夏子	1931(昭和6)年～ 1940(昭和15)年

出典 昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』アテネ書房, 2003年から作成。

## おわりに

1939(昭和14)年に発行された『茨城県総合郷土研究』では、50曲の新民謡の曲名のみが列記されていた。茨城県出身の野口雨情が作詞した新民謡は、5曲(10%)であった(《助川小唄》, 《龍ヶ崎小唄》, 《龍ヶ崎音頭》, 《筑波小唄》, 《筑波節》)。特段、野口雨情に関する解説はなかった。新民謡に関しても、重点的に解説されたり、楽譜が掲載されたりする曲はなかった。

その一方、元々、舟唄(艫漕唄)で、宴席により修正、流行した《磯節》は、伝説的民謡というよりは、新民謡としての性格が強く、「雑謡」として分類されていた。《磯節》は、『茨城県総合郷土研究』において「民謡」、「音楽」、「舞踊」の三箇所にわたって丁寧に解説され、楽譜も掲載され、主要な民謡として位置付けられていた。

ところで、茨城県師範学校第二附属常盤小学校編纂の『郷土教育の再検討と其の実際的研究』(1932)には、「第十二章 郷土の音楽性に基く音楽教育」が所収される。「郷土民謡」に関しては「磯節、水戸音頭、大工町小唄、盆踊、豊年歌位で教育的価値ありと認められるもの殆どなし」と記され、《磯節》が教材として位置付けられていた<sup>13</sup>。

戦後に関しては、筆者の確認したところ、1957(昭和32)年、教育芸術社発行の『教芸決定版 中学音

楽1』<sup>44</sup>、1965(昭和40)年、教育出版発行の『新版標準音楽5年』に<sup>45</sup>、茨城県の代表的な民謡として、《磯節》の曲名のみが掲載されていた。

2024(令和6)年度、現在、小中学校の音楽教科書は2社から発行されている。その内の1社である、教育出版では、小学校、中学校ともに茨城県の代表的な民謡として、《磯節》の曲名のみが掲載されている<sup>46</sup>。

その他、1955(昭和30)年発行の中山義夫『日本の民謡』においても《磯節》が紹介される<sup>47</sup>。

今後は、戦前から戦後、ラジオ放送等についても調査を広げ、他の師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けと戦後の学校教育への波及について追究していきたい。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 21K02465(基盤研究C「戦前の新民謡運動を契機とした師範学校における郷土教育の展開と戦後への波及」)の助成を受けたものである。

本稿は、日本音楽教育学会第55回大会(2024年10月、於:玉川大学)において口頭発表した内容を発展させたものである。

<sup>1</sup> 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版, 2008年, pp.95-169。

<sup>2</sup> 同書, pp.361-407。

<sup>3</sup> 鈴木慎一郎『山梨県総合郷土研究』における新民謡:『微細郷土研究:加納岩町に関する』を参照して『地域学論集』第18巻第2号, 鳥取大学, 2021年, pp.17-32。

<sup>4</sup> 鈴木慎一郎『香川県総合郷土研究』における新民謡:《高松小唄》に着目して『地域学論集』第19巻第1号, 鳥取大学, 2022年, pp.89-105。

<sup>5</sup> 鈴木慎一郎『秋田県総合郷土研究』における新民謡:鹿角に着目して『地域学論集』第20巻第3号, 鳥取大学, 2024年, pp.45-58。

<sup>6</sup> 外池智「師範学校における郷土教育の実践的展

- 開：茨城県女子師範学校を事例として』『筑波社会科学研究』第19号，筑波大学社会科学教育学会，2000年，pp.39-49。
- 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究：『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』NSK出版，2004年，pp.379-414。
- 7 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』思文閣出版，1998年，p.318。
- 8 櫻村勝『茨城県師範学校史：付茨城県女子師範学校史』1973年，p.194。
- 9 同書，pp.317-318。
- 10 茨城県女子師範学校『郷土教育概要』茨城県女子師範学校郷土館，1934年，p.1。
- 11 同書，pp.2-4。
- 12 同書，pp.4-13。
- 13 同書，p.9。
- 14 同書，pp.9-11。
- 15 同書，p.10。
- 16 同書，p.10。
- 17 同書，p.14。
- 18 同書，p.15。
- 19 昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』アテネ書房，2003年，p.51。
- 20 同書，p.92。
- 21 同書，p.234。
- 22 同書，p.516。
- 23 東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』踏青社，1995年，pp.612-616。
- 24 昭和館，前掲書，p.420。
- 25 森田秀雄「3 音楽」茨城県師範学校・茨城県女子師範学校編『茨城県総合郷土研究』下巻，1939年，p.190。
- 26 橋はや「4 舞踊」茨城県師範学校・茨城県女子師範学校編『茨城県総合郷土研究』下巻，1939年，p.203。
- 27 小沼俊平「5 民謡」茨城県師範学校・茨城県女子師範学校編『茨城県総合郷土研究』下巻，1939年，p.297。
- 28 同書，p.298。
- 29 同書，p.298。
- 30 同書，p.299。
- 31 同書，p.297。
- 32 同書，pp.191-192。
- 33 同書，pp.202-203。
- 34 山形雄三『祝町昔がたり』1981年，pp.42-77。
- 35 伊藤純郎『三浜漁民生活誌：大洗地方の近代史』崙書房，1990年，pp.49-80。
- 36 日本放送協会編『日本民謡大観 関東篇』日本放送出版協会，1944年，p.55。
- 37 町田嘉章・浅野建二編『日本民謡集』岩波書店，1960年，p.176。
- 38 今瀬文也「主要曲解説」『日本民謡全集 ③ 関東・中部編』雄山閣出版，1975年，p.19。
- 39 山形，前掲書，pp.292-306。
- 40 浅野建二編『日本民謡大事典』雄山閣出版，1983年，p.54。
- 41 竹内勉『日本民謡事典Ⅱ 関東・甲信越・北陸・東海』朝倉書店，2018年，pp.284-285。
- 42 森垣二郎『レコードと50年』河出書房新社，1960年，pp.183-187。
- 43 井坂教「第十二章 郷土の音楽性に基く音楽教育」茨城県師範第二附属常盤小学校編『郷土教育の再検討と其の実際的研究』教育実務社，1932年，p.305。
- 44 市川都志春・松本民之助・石桁真礼生『教芸決定版 中学音楽1』教育芸術社，1957年，p.41。
- 45 池内友次郎・木下保監修『新版標準 音楽5年』教育出版，1965年，p.31。
- 46 新実徳英監修『小学音楽 音楽のおくりもの5』教育出版，2024年，p.41。
- 新実徳英監修『中学音楽1 音楽のおくりもの』教育出版，2021年，p.31。
- なお，教育芸術社では，茨城県の代表的な民謡として《網のし唄》を掲載する。小学校では，2023(令和5)年度まで使用されていた教科書には，《磯節》が掲載されていた。
- 小原光一ほか『小学生の音楽5』教育芸術社，2024年，p.61。
- 小原光一ほか『中学生の音楽1』教育芸術社，2021年，p.62。
- 小原光一ほか『小学生の音楽4』教育芸術社，2020年，pp.30-31。
- 47 中山義夫『日本の民謡』鶴書房，1955年，pp.56-58。
- なお，島田豊年『新しい民謡の踊り方』鶴書房，1963年には，《磯節》は所収されていない。茨城県の代表的な民謡として，《常盤炭坑節》と《草刈馬子唄》が掲載される。